

ずいそう

お迎えさん



篠原慶二

私はゼネコンでは機電屋と呼ばれる職種のいわゆる便利屋でトンネル工事、シールド工事、ダム工事に携わって40数年になります。建設機械しか知らない機械屋です。朝から晩までトンネル機械、シールド機と顔合わせていました…ある日。

私のコンクリート技術に関するお師匠様の当社のコンクリート博士の（故）山田一字技術研究所・所長がこんな話をしてくれました。

「おい！篠原君，お前トンネル機械好きなんか？壊れた原因も解らずよく直すな！機械ばかり直しても切りがないぞ！壊れる相手を知らなきゃな！相手はコンクリートと岩石だぞ！」と言うことでお師匠はコンクリート工学の本を私に貸してくれました。そのお師匠がトンネルドリルジャンボを直している私の横でトンネル坑内の工具箱に座って話を始めました。俺はこんな経験があるぞ。

【お師匠の話】

俺は、恥しながら今から十数年前に車で大事故を起こしたことがある。相手は故障で路上に停車していたダンプトラックで、俺は居眠り運転をしていて突っ込んでしまった。幸いにも第三者に迷惑をかけずに済んだのがせめてもの慰めだった。

偶然に通りがかった救急車で夜9時頃病院にかつぎ込まれたそうだがまったく記憶が無い。病院には眼科の当直医がいたそうだが、外傷のあまりない俺を見て“ヨッパライだから放っておけばそのうち目が覚めるよ”ということで、翌日まで放っておかれた次第。翌日10時になっても意識が戻らず“ちょっと変だな”ということで、レントゲン撮影となり、結果を診てビックリしたそうだ。腸が切断し、肝臓が5つに割れ、足は複雑骨折、頭部顔面打撲等々13項目あり、診断書に書くスペースがなくなり最後に「その他」と記してあったらしい。（後でわかった話だが、臓器が破裂し腹の中に腸内の物が出ていたため吐く息がかなり臭く、そのためヨッパライと誤認されたらしい）。

虫の息の俺に午後2時から開腹手術が行われ、とりあえず手当はされたが、危篤状態にあったため、足の骨折等その他の治療は“生きる目途が立ってからにしよう”ということで治療されない状態だった。

お師匠の「冥土往来」の話だった。

手術後、担架でベッドに移されたのは薄々感じていたがベッドで一休みしていると、どこからともなく人間の形をした全身真っ赤なタイトスのようなものをまとったスラっとした2人がベッドの脇に現れたのさ。

顔は全く無表情だった。男か女かも分からない。俺はこの者たちの男女を確認した。

根がスケベーだからもし女性だったら……と考えたらしい。しかし、この人達、女性の出るべきところがまったく出てなく、さりとて男性としてのモッコリもなく、それは不思議な人物(?)だった。（この人物一般には「冥土からの使者」または俗に「お迎えさん」というらしい）。

その間の時間ははっきりしないが、この2人俺を両脇に抱えゆっくりとベッドから引きずり下して立たせ、猛スピードで病院から連れ出したのさ。途中の道筋や雰囲気は残念ながら記憶に無い。到着したところはかなり広い真赤な砂が敷かれた広場で、周りは真っ暗闇で、かがり火がいくつも燃えており、奥の方には大きなコンクリート塀(?)が長く連なっていた。左の方には大きな門柱が2本立ってたな（しかし、内は暗くてまったく見る事ができなかった）。

その広場には大勢の人が時計回りに楕円形の形でダンスのようなものを踊っていた。何の躊躇もなく2人の「お迎えさん」に誘われてこの輪に加わり、ダンスのできない俺が今まで味わったことのない楽しさで踊り始めんだ。ただし、両脇には病院からずっと一緒に来た「お迎えさん」がピッタリとくっついており、その隣に誰がいるのかわからなかった。

“何と素晴らしい世界があるものだなあ”と本人しごくご満悦の様子。この時計回りのサークルは左の方にある門柱のところまでつづいていたが…。

ここでも一大出来事が起こったのさ。

楽しいダンスをしながら徐々に門柱に近づいてゆくと、突然両脇の2人が俺を門柱の中に投げ入れようと必死になっている。俺も綱引きの要領で地面に穴を掘って懸命に抵抗したのだが、この時の葛藤は想像を絶するものだったさ。

ある時は十分に抵抗できたが、その門柱を通り過ぎ

ると、それはまた楽しい世界に入れるのさ。しかし、両脇の2人の力が強くて地面に溝を造りながらギリギリと門柱近くまで引きずられてゆくと、これまた突然孔の開いた白いものが見えた。実はこれが「病院のベッドの天井」だった。すなわちこの時点で冥土の入り口より現世に戻っているのさ（生命力の強さでもんだな）。

この時、周りの声は聞こえるのだが、本人はまったく声を発することができない。後で聞いた話だが俺はときどき目を開けていたという。しかし、数秒後には最初と同じ状態で2人の「お迎えさん」が両脇に現れ、一連のセレモニーの後、あの赤い砂の広場に連れて行かれたのさ。この繰返しを何十回・何百回と行ったような記憶だったな。この間、開腹手術をされているにもかかわらず、痛みは全くないのだよ。

事故から数週間後の何百回目かの現世に戻った時に、「お迎えさん」が現れなくなったな。何度となく目をつむり2人の「お迎えさん」を待ってみたが、結局現れなかったな。その時の残念さは誰にも解らなだろうな。あの素晴らしい世界に二度と行けなくなったという無念さだよ。

篠原君！聞いているのか？

私の手はラジエツトレンチを必死に回していました。

この頃からまわりの言葉が聞こえるようになり、苦痛の世界へ入っていったのだよ。その後再び手足の手術が始まったのさ。

この冥土へ行った話をよく母親にしたな…母は“それでは父親（昭和20年戦死）に会って来ましたか”と聞くが、俺の考えでは“父親は門柱の中にいるため会えなかったのだろう”と答えた。門柱の間をくぐれば、それは完全な死の世界だろうと思った。

お説教で死後の世界の話がよくあるだろう。死後の世界を語ることは門柱をくぐってしまった人は出来ないのだよ。世の中不思議なことがよく起こるが、冥土の世界でも「お迎えさん」の力に負けて門柱の間をくぐった人が何かのハズミで再びハジキ出されて現世に戻っても不思議じゃないのだよ。俺のような人間が本当に死後の他界を語れるのだよ。

この2人の「お迎えさん」と仲良くなり、うまく利用することができれば、かなり長生きができると信じているが…。

篠原君はこの話を信じるか？

ドリルジャンボの修理は終わっていましたが、私の工具箱に座っているお師匠に“どいてもらえますか？”とは言えませんでした。

お師匠はこんな状況だったようです。



図—1